

ピアホームだより

2023. 11. 10

電気けいれん療法（ECT）について

8月1日より、難治性精神疾患研修会の中の、電気けいれん療法（ECT）研修が始まっています。電気けいれん療法は、骨折や口腔内損傷といった身体に及ぼす影響や、認知・記憶障害など、脳への影響も大きく伴っていたことから、虐待ともとれるような悪い印象を持たれがちでしたが、効果が見られることもまた事実で、それにより研究が進められてきました。ECT実施後は、海馬、側頭葉、小脳で脳血流が2倍近く増加することが確認されており、これが症状を軽くすると見られています。近年は、技術の発展により、マイナス面の部分が緩和されたことで、急激に実施件数が増え、平成26年度には全国で3,638件の実施だったものが、平成29年度には6,402件になりました。

緩和された問題点

身体的負担については麻酔や筋弛緩剤の導入、また、脳への負担についてはサイン波からパルス波に変更することで軽減されました。

技術の発展によって解決した問題点

骨折	筋弛緩剤の使用
不安・恐怖感	鎮静麻酔薬の使用、十分なインフォームドコンセント
循環器障害	修正型 硫酸アトロピンの使用、十分な酸素投与
窒息	絶飲食と全身管理
口腔内損傷	口腔内保護員の使用
認知・記憶障害	パルス波治療器の使用、十分な酸素投与
遷延性けいれん	脳波モニター
火傷	パルス波 サイン波からパルス波に変更、刺激条件の変更、 使い捨て刺激電極の使用

ECT実施までの判断

問題点が少なくなったとはいえ、軽減されたのは本人の苦痛の部分が大きく、身体的負担がゼロになったわけではありません。当然、重症度や緊急性と、身体的負担を天秤にかけて、実施の判断がなされることとなります。適応となる診断かどうか、適応となる状況かどうか、身体状況も加味され、慎重な判断がなされます。



適応となる疾患

うつ病、双極性障害、統合失調症が、緊急性により、積極的適応の対象とされています。また、選択的適応の対象として、パーキンソン病、悪性症候群、強迫性障害、身体神経疾患に続発する気分障害、精神病性障害、気分障害に関連する慢性疼痛性障害が挙げられています。

治療計画の要素

1コースの治療回数（最大12回）、治療頻度（例：週2回）、刺激条件（刺激部位×パルス幅×刺激電気量）について検討します。

	特徴
前頭部両側性	・側頭部両側性よりも認知機能障害は少ない可能性 ・側頭部両側性よりも有効性は劣る
側頭部両側性	・開始初期に治療効果が期待できる ・認知機能障害が生じやすい
右片側性 (d'Ellaの配置)	・認知機能障害が少ない ・けいれん閾値が両側性よりも低い ・治療効果が出るまでに回数が必要

疑問点

作用機序については未だ仮説のみで未解明とされています。

11月の予定

11月4日：症例検討会